

AFV COLORING MUSEUM

AFVカラーリング博物館

吉川和篤【イラスト・解説】
「月刊アーマーモデリング」編集部【編】

大日本絵画

AFV  Armour Modelling PRESENTS

COLORING MUSEUM

AFVカラーリング博物館

吉川和篤 [イラスト・解説]

『月刊アーマーモデリング』編集部 [編]

大日本絵画



AFV COLORING MUSEUM

AFVカラーリング博物館

本書について

●本書『AFVカラーリング博物館』は、世界のAFV（戦車、突撃砲などの装甲戦闘車両の略称）に施されたカモフラージュと車両の概要を、軍事研究家・イラストレーターである吉川和篤さんの精緻なカラー・イラストと解説文によって多角的に紹介するものです。模型情報誌『月刊アーマーモデリング』に49回にわたり連載された記事を元に、未発表の描き下ろし3回分（6ページ）を加えて再編集しました。収録されている車両を生産したのは、第二次世界大戦時の連合国側が4ヶ国、枢軸国側5ヶ国、計9ヶ国。そこから代表的な車種25種類がセレクトされています。側面・前面・後面からなるイラストは、所属部隊や車両番号が特定されている車両を正確な三面図から起こし、迷彩塗装のパターンやマーキング、塗装の色調、質感までを精緻に表現。一部にはマーク部分の拡大イラストも付け加えられています。さらに車両の概要是、開発経緯と使用状況のほか、注目すべき特徴やトピックが簡潔に記されています。さらに乗員の服装や特徴的な装備などを扱ったコラムも掲載。全体を俯瞰すれば、AFVの発展の流れや、使用国のお国柄まで窺い知ることができます。できるよう意識して書かれています。模型の製作や塗装の参考に役立つだけでなく、車両に対する興味が深まるかもしれません。

TABLE OF CONTENTS

目次

003-007	卷頭特別対談 吉川和篤 × 杉山潔 軍事研究家・イラスト レーター・ライター	(『ガールズ&パンツァー』 初代プロデューサー)
008～	連合国サイド	ALLIED SIDE
010-021	イギリス編	UNITED KINGDOM
022-033	アメリカ編	UNITED STATES
034-041	フランス編	FRANCE
042-049	ソビエト編	SOVIET UNION
051～	枢軸国サイド	AXIS SIDE
052-073	ドイツ編	GERMANY
074-093	イタリア編	ITALY
094-107	日本編	JAPAN
108-111	ハンガリー編	HUNGARY
112-115	フィンランド編	FINLAND
116-119	巻末特典 イラストメイキング	



【巻頭特別対談】

冒頭では、この本に収録されたすべてのイラストレーションと解説文を執筆した吉川和篤さんと、「ガールズ&パンツァー」の初代プロデューサーでもミリタリーにも造詣が深く、吉川さんと以前から親交の篠井杉山潔さんとの対談を圧縮してお届けしよう

[2025年5月12日 アートボックスで収録]

吉川 和篤

[軍事研究家・イラストレーター・ミリタリーライター]

り立っている

杉山 潔

[アニメ「ガールズ&パンツァー」初代プロデューサー]

“すべては、人との縁の繋がりで成り立っている”

吉川 何度目かのとき、友人にイタリア軍のゲートルを買ってきて欲しいと頼まれて、現地で入手したそれを眺めていたら、なんだん嵌まってきたんですね。それでイタリアのアーティストたちが、そこで描いていたんだよ。

吉川 いいえ。MMに限らず、戦車と言つたら、なんてたつてシャーマンですよ!!

吉川 僕も作りましたよ(笑)。でも、最初はドイツ軍からです。当時は戦争映画が華やかになりしきろで、それを観るとやっぱりドイツ軍が格好いいんですよ。それがいろいろ調べるようになつたきっかけです。大人になると、ますモデルガン、次に軍装に興味が移つて、洋書も買うようにもなるんですが、だんだん飽き足らなくなつてきて、フランスまで買い付けに行くようになりました。

吉川 渋谷や御徒町とかではなく……。

吉川 フランスにはドイツ軍の補給品のデポがあつたので、戦後に放出された品物を売るショップができていたんですよ。

イタリア軍アイテムとの接近遭遇

吉川 何度もアーティストたちが、そこで描いていたんだよ。

吉川 そこでは、イタリア軍の支給キャラメルや、喫っていたタバコの銘柄まで聞くことができたんですね。^{’90年代の終わりから2000年代の初めというのは、ベテランでも元気な人はまだ元気だし、聞き取りができる最後のチャンスだったと思います。}

吉川 は多彩な活動をされていて、いろいろな顔をお持ちなので、今回はプロフィールを含めてご紹介ができます。

吉川 もともと僕は広告畑のグラフィックデザイナーなんですよ。数年前に退職しました。現在は、フリーで軍事ライターとイラストレーターをメインにしています。

吉川 絵は昔から描かれていたんですね。企業広告の企画段階で、完成イメージのカンプを作ると同時に、自分でメカや人物トレイラーを描くことも多かったです。

吉川 最初のミラノ旅行では着いて即、軍装品店を調べて訪ねました。そこは一階は普通の骨董品店なんですが、床板を上げると螺旋階段が出て、地階に下りるとドイツ軍とイタリア軍の軍装品がドットと置いてあって、ドラマや戦争映画のシーンそのままじゃないですか。店頭に出せないものが地下に仕舞つてあるっていうのは。

吉川 それがおもしろいことに、店主がイタリアのミリタリーワー界の重鎮の友人だったんですよ。ミリタリーワー誌のライター何人かとともに知り合いで、みな友人として繋がつていて。

吉川 どこの業界は狭いですからね。吉川 ある日、そのひとりから「次に来るときはスイスにいる退役軍人を紹介する」と連絡があつたんです。それでスイスに行つたら、例の本の元兵士で、いろんな写真を見せてくれました。そのあたりで、完全にイタリア軍に対する「やる気」が目覚めましたね。

吉川 なるほど、現地で目覚めたんですね。吉川 それでその人に自分で手描きした肖像画を贈つたり、逆に写真を送つてもうことで信用を深めることができたんです。で、一回信頼されると、いきなり紹介の輪が広がるんですよ。同じ師団の別大隊や、空挺部隊の戦友会も紹介されて。それからは年に3回はイタリアに行くようになりました。

吉川 そこでは、イタリア軍の支給キャラメルや、喫っていたタバコの銘柄まで聞くことができたんですね。^{’90年代の終わりから2000年代の初めというのは、ベテランでも元気な人はまだ元気だし、聞き取りができる最後のチャンスだったと思います。}

重装甲で無双した砂漠の女王、マチルダII MK.III（前編）



古今東西の戦車のうんちく話や塗装パターンを車両別に紹介する本書。ここではイギリス歩兵戦車として大戦初期に開発され、その重装甲で活躍したマチルダ戦車について解説します。模型作りや塗装の参考にご一読ください。

▲イギリスのボービントン戦車博物館で開催された、タンクフェスタ2019に参加したマチルダMk.III歩兵戦車。履帯は滑り止めパターンが改善された後期型を装着している。

UNITED KINGDOM
イギリス

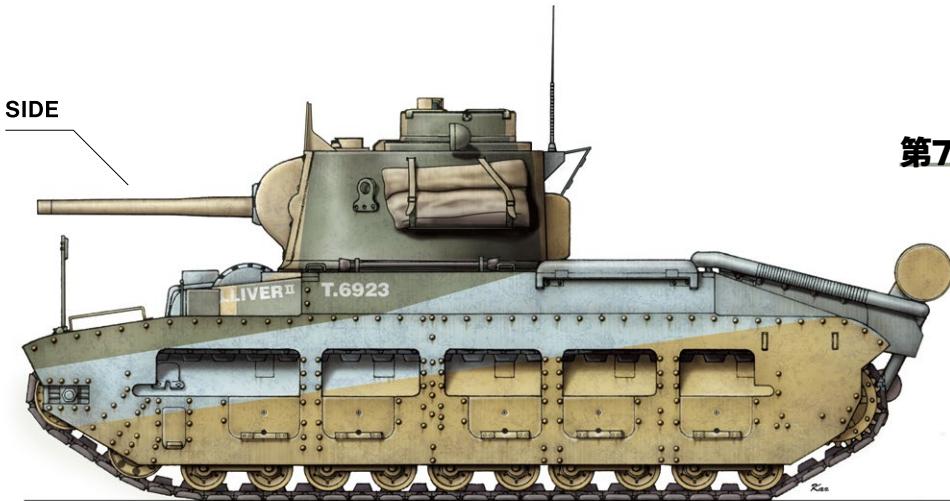
MATILDA II MK.III

Tank, Infantry, Mk.IIA* (Matilda II Mk.III)

AFV
COLORING
MUSEUM

歩兵戦車 Mk.IIA*
マチルダ II Mk.III

SIDE



イギリス陸軍
第7王立戦車連隊所属車両

◀1941年秋、リビア戦線における歩兵戦車マチルダIIのMK.III「ガリバーII世」号。車体は一般的に見られたデザートイエロー色ベースにダークグリーンとライトブルー色の直線的な三色パターンが筆塗りされている。これは軍艦に見られるダブル迷彩（幻惑迷彩）に似ており、遠方から敵を視認できる砂漠を海に戦車を船に見立てた仕様だと思われる。遠目で見ると戦車の形状や進行方向と速度をわかりづらさせる効果もあり、前年から同戦線に投入された敵イタリアM11/39中戦車にも同様な幾何学パターンが確認できる。

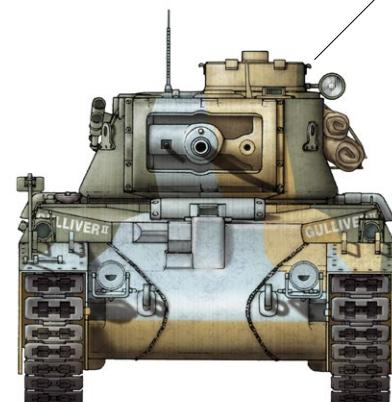
KIT RECOMMEND
マチルダIIのオススメキットはこれだ!



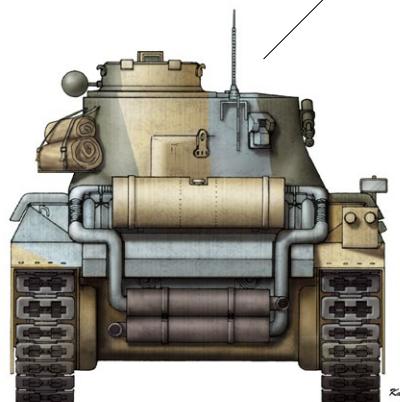
●タミヤ製マチルダはMMシリーズ300番の記念すべき製品。組みやすくとてもよい製品だ。履帯はベルト式と部分連結式の選択式で、好みに合わせて選べる。

イギリス歩兵戦車 マチルダ Mk.III/IV
●タミヤ (1/35 税込4180円)
□タミヤ www.tamiya.com

FRONT

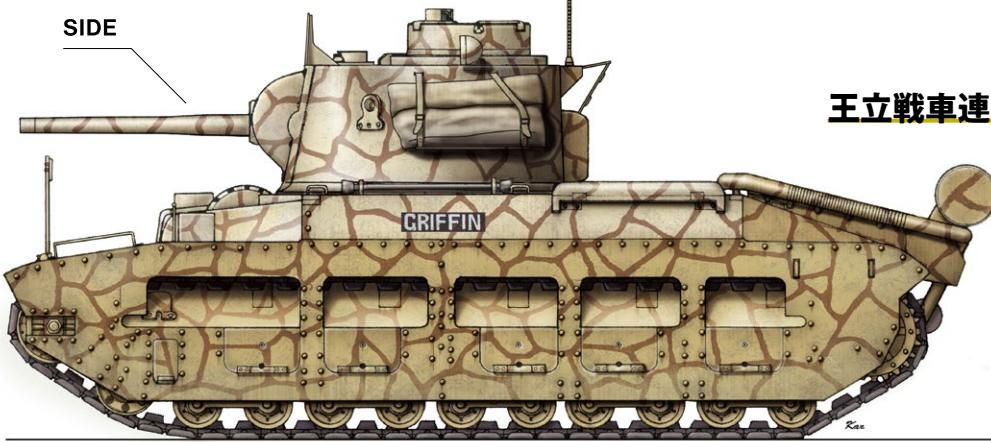


REAR



◀前面と後面から見た「ガリバーII世」号。幾何学迷彩の効果を上げるために、車体には側面のT（タンク）ではじまる陸軍省登録ナンバーとニックネーム以外は何も書かれていません。しかしほかの車両では、砲塔と車体側面に味方識別用に描かれた四角い白/赤/白のパネルもしばしば確認できる。またイラストの履帯は、スタンプ・タイプと呼ばれたH型の溝がモールドされた初期タイプだが、泥が詰まると滑りやすく長短モールド付きの後期型が誕生した。

SIDE



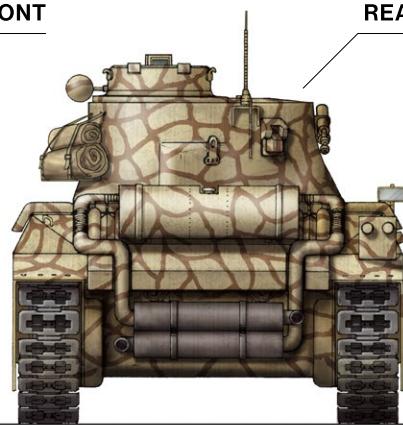
イギリス陸軍 王立戦車連隊マルタ島分遣戦車中隊 独立第4小隊所属車両

◆1942年に地中海のマルタ島に展開した分遣戦車中隊所属の歩兵戦車マチルダIIのMk.III「グリフィン」号。右ページとは打って変わってデザートイエロー色ベースにダークブラウン色の網目模様が筆塗りされているが、これは植物が少なく道路や煙を縁取る石垣を模した迷彩パターンと推測される。少なくとも3両のマチルダ戦車がヴァレンタイン歩兵戦車などとともに同島に派遣されていたが、独伊両軍による上陸侵攻作戦は実施されずに戦闘参加はなかった。ニックネーム以外は書かれておらず、もとは第7王立戦車連隊所属であった。

FRONT



REAR



►こちらも前面と後面から見た同じ「グリフィン」号。車体正面のバイザーやペリスコープ周りの非対称で複雑な形状がよくわかる。イラストでは描かれていないが、前方の左右フエンダー上のコの字枠は予備履帶用ラックで、砲塔の左側面の専用ラックには兵員用のテントも兼ねた車体カバーが丸めて収納されている。また砲塔の右上面の砲手用ペリスコープの横には、光学照準器が破損した際にも使用される車長用の直接照準器が溶接されている。

MECHANICAL COLUMN ベサ車載機関銃



●マチルダ戦車の試作型およびMk.Iの砲塔右側には水冷式のヴィッカース機関銃が搭載され、その太いジャケットを覆う装甲カバーが大きく張り出していた。しかし重くかさ張るため英陸軍は車載機関銃の軽量化をめざして、チェコスロバキア製で空冷・ベルト給弾方式のブルーノVz.37重機関銃(ZB-53)のライセンス生産を決めた。このBSA社で生産されたベサ車載機関銃はMk.IIから搭載され、7.92mm口径だったため歯獲したドイツ軍弾薬も使用可能であった。

第一次大戦では菱形で世界初の実用戦車Mk.Iを開発して戦場に送り込んだイギリスは、戦間期も戦車開発の先進国としてフランスとともに世界に君臨して数々の戦車を開発しました。そして第二次大戦前に中戦車を歩兵とともに進撃が可能な歩兵戦車と機動力による前線突破と追撃戦を目的とした巡航戦車の二方向に分けて配備・運用するという概念が誕生します。この歩兵戦車には厚い装甲と超壕能力が求められ、巡航戦車は歩兵戦車より装甲は薄いながらも高速性が求められました。

その思想から1936年に歩兵戦車Mk.I(A11)が開発されましたが、予算不足により当初の理想とは掛け離れた小型の2人乗りで砲塔に7.7mm機関銃装備だけの大きめの豆戦車となってしまいます。最大装甲厚は60mmで重量も八九式中戦車並みの11tもありながら不整地での最高速度は12km/h程度しかなく、結局は兵器としては中途半端な存在であったために量産は140両で中止されてしまいます。

その代わり1938年にはより大型で3人乗りの歩兵戦車Mk.II(A12)が開発されました。

た。歩兵戦車の流れ汲んで砲塔や前面上部が75mm厚の重装甲となり、武装も52口径2ポンド(40mm)戦車砲(93発)と7.7mm水冷式機関銃または7.92mmベサ機関銃(2925発)装備とまったく新しい設計となりました。最高速度も24km/hとA11の倍になり、小転輪を組み合わせたイギリス戦車の伝統的な足周りには、ヴィッカースMk.C戦車にも採用された2個転輪を配置したボギー2個を中心の水平コイルスプリングで懸架するサスペンション方式が使われました。これは九四式軽装甲車から日本戦車の定番となり、イギリスでも「日本式」と呼ばれています。

そして以前の歩兵戦車A11はマチルダI、新型のA12はマチルダIIあるいは「マチルダ・シニア」と呼ばれて配備が急がれました。このマチルダIIは、Mk.IからMk.Vまで3千両近く生産されて大戦初期から中期のイギリス歩兵戦車の中核を成します。1940年のフランス戦参加ではドイツIII号戦車やIV号戦車の短砲身では重装甲に歯が立たず、88mm高射砲の水平射撃でようやく食い止めました。

MATILDA II MK.III

【日本軍の英戦車2】さらに日本初の量産型戦車を開発していた時期の1927年(昭和2年)に英ヴィッカースMk.C戦車が1両輸入され、後の八九式中戦車の設計に大きな影響を残した。また1930年(昭和5年)に試験目的で英カーデンロード装甲車Mk.VIを2両購入しており、これが陸軍最後の輸入戦車となった。

アメリカ戦車の代名詞、 M4A1シャーマン中戦車（後編）



このページでも、第二次大戦中のアメリカ戦車を代表する、M4A1シャーマン中戦車について解説します。モデリングや塗装の参考にご一読ください。

▲1943年、北アフリカにおけるM4A1中戦車初期型。砂を塗り付けた沙漠迷彩は下部だけで、オリーブドラブ単色塗装の車体側面には、星条旗マークも見える。

UNITED STATES
アメリカ

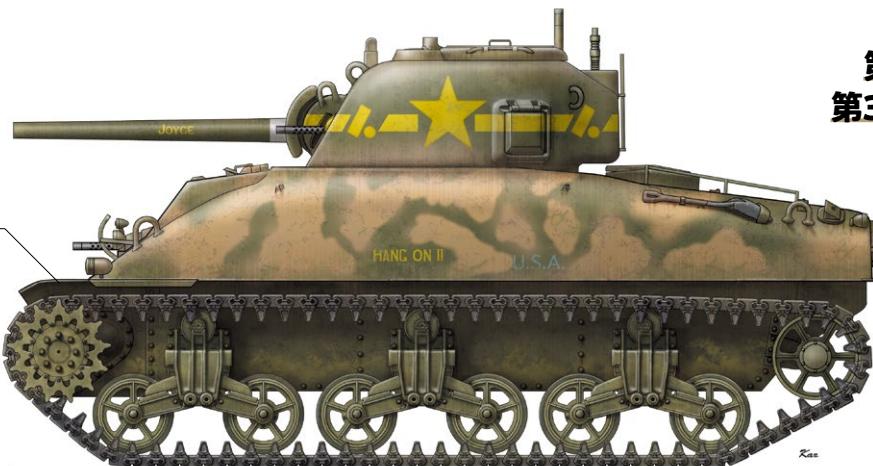
M4A1 SHERMAN

Medium Tank M4A1 (75)

AFV
COLORING
MUSEUM

M4A1 中戦車
“シャーマン”

SIDE



アメリカ陸軍
第1機甲師団第1機甲連隊
第3戦車大隊I中隊所属車両
「HANG ON II」号車

▲1942年11月に始まった“トーチ”作戦で北アフリカ・チュニジアに上陸した、M4A1中戦車「HANG ON II」(抱きつき二世)号。当初は沙漠や荒地の多いチュニジアに適した迷彩用のアースイエロー系塗料が不足していたため、部隊判断でオリーブドラブの基本塗装の上に沙漠の砂や泥を水で溶いた即席の沙漠用塗料が、車体を中心にして刷毛で塗られた。砲塔側面には黄色の星章と中隊マークや味方識別用の横帯が、砲身には女性名の「Joyce」が書かれている。

KIT RECOMMEND
シャーマンのオススメキットはこれだ！



●イラストと仕様は異なるが特徴的な直視バイザーや、車体上部に加え、大型のサンダードームやM3中戦車と同じ極初期型の垂直懸架サスペンションなど実戦投入されたM4A1の最も初期の姿をモデル化したキット。

アメリカ中戦車 M4A1シャーマン初期型

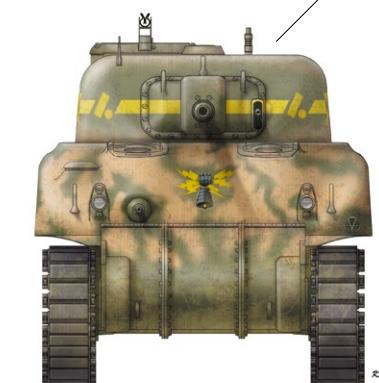
(直視バイザー型)

●アスカモデル (1/35 税込6050円)

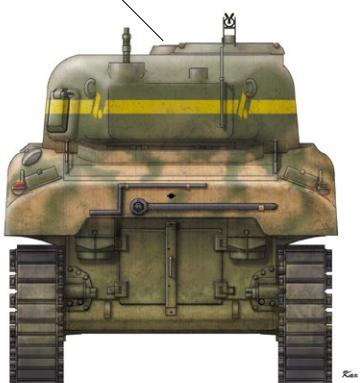
同アスカモデル

<https://asukamodel-website.com>

FRONT



REAR



▲「HANG ON II」号車の前後面。車体全面の中央には、第3戦車大隊所属を示す電光をつかむ甲冑の手甲(ガントレット)を描いた部隊マークが、即席迷彩に隠れて見える。こうした自然材料を使った迷彩塗装は風雨や振動の影響を受けやすく剥がれてしまい、パターンも端々でボケている。また同戦車は車体下部に接合用リベットが見え、機関室上部に荷物用ラックが、砲塔後部に旗用と思しきポールが追加されている。

【M4中戦車と砲弾箱】 初期のM4A1中戦車では75mm砲弾箱が車体左右の袖部(スパンソン)に設置されていたが、敵に撃たれた場合に簡単に誘爆しやすく、撃破原因のトップに上がった。燃えやすいため、イギリス兵にはライターの「ジッパー」、ドイツ兵には「英軍式調理器」とも呼ばれる始末であった。

SIDE



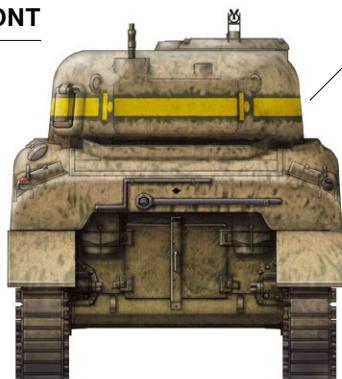
**アメリカ陸軍
第1機甲師団第1機甲連隊
第2戦車大隊
E中隊所属車両9号車**

◆同じく1943年2月、チニジアで枢軸アフリカ軍團と戦闘中の第1機甲師団所属のM4A1。「HANG ON II」号車とは異なり、砲塔も含めた車体全体に水で溶いた砂や泥が星章や中隊マーク、横帯を避けて荒く塗り付けられている。元々9号車の番号が砲塔側面の星章にちいさく黒色で書かれていたが、その後で搭乗員により巨大な「9」が車体側面に書かれた。同戦車はサイドスカートを装着しているが、歐州戦線では泥詰まりを恐れしばしば外されている。

FRONT



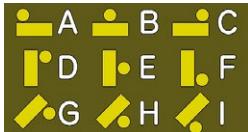
REAR



▶前面と後面から見た9号車。砂や泥が隙間なく全体に塗られており、カラー記録映像に写ったM4型は、黄色い土煙が移動している様にも見える。サイドスカートの前後には延長された泥除けフェンダーが取り付けられているが、これもイタリア戦線では前側だけが外された例が確認できる。2月中旬、同中隊はドイツ第21装甲師団や第501重戦車大隊のティーガーI戦車と死闘を演じた。

COLORING COLUMN

アメリカ戦車の中隊マーク



●参戦当初アメリカは意外なほど防諜には気を遣っており、車体側面後方に書かれた登録番号は目立つ白色ではなく青色であった。また中隊記号は、部隊ごとに秘匿化を目的にデザイン化されていた。たとえば第2機甲師団第67機甲連隊では、白色の横棒と大小の四角形の組み合わせでA～Iの9個中隊を、第1機甲連隊では黄色で描かれた円の位置や長方形の傾き方で9個の中隊を示していた（当時のアメリカ機甲連隊は3個大隊、1個大隊は3個中隊）。

1939年9月に欧州で始まった戦争を契機にアメリカも本腰を入れて中戦車の制式化を目指し、1940年にM3中戦車が開発されました。同戦車では主砲である75mm戦車砲は車体右側に搭載され、砲塔には副武装として37mm戦車砲が搭載していました。こうしたスタイルは戦前に各国でも一時的に流行り、フランスのシャールB1重戦車やイタリアのM11/39中戦車など、車体側に主砲を砲塔に副砲を積んだ戦車が1930年代に登場しました。

これは当時、大型砲塔の製造に必要な大直径砲塔リングの量産化が困難であったことも一因ですが、全周旋回式砲塔に主武装を搭載していない戦車では周囲を敵兵や敵戦車に囲まれた場合の戦闘力に問題があり、間もなくこの方式は廃れてしまいます。

アメリカもこの流れは無視できず、結果としてM3は次に登場するM4中戦車への繋ぎ

としての役割になりました。しかしその75mm戦車砲や垂直渦巻きスプリング式サスペンションと転輪2個のボギーを組合せた懸架方式(VVSS)の足周り、車体下部の構造や元々は航空機用に開発された空冷星型エンジンの搭載とそれによる車高の高さなどは、そのままM4に受け継がれたのでした。つまりM3とM4は中戦車の兄弟だったのです。

完成したM4中戦車は、上部車体が鋳造構造のM4A1や溶接構造のM4から始まり、武装や懸架方式を変えてさまざまな派生型が生まれますが、液冷式エンジンに変更されても背の高いシルエットは一貫して同じでした。

これは戦前に戦車開発が遅れた一因の官僚主義的な理由かもしれませんのが、隙間無い船詰みを考慮して戦車を上から見て箱形にしたような、大量生産への悪影響を極力排除するアメリカ的合理性もあるからでしょうか。

線画製作・資料協力／丹羽和夫

M4A1 SHERMAN

平凡ゆえに主力を務めた IV号戦車（後編）



このページでは、第二次大戦での東西南北の各戦場において、常にドイツ軍の主力戦車であったIV号戦車の解説が続きます。模型作りや塗装の参考にご一読ください。

▲ロシア・モスクワ郊外の愛国者公園に展示される、7.5cm戦車砲装備のIV号戦車G型「432」号車

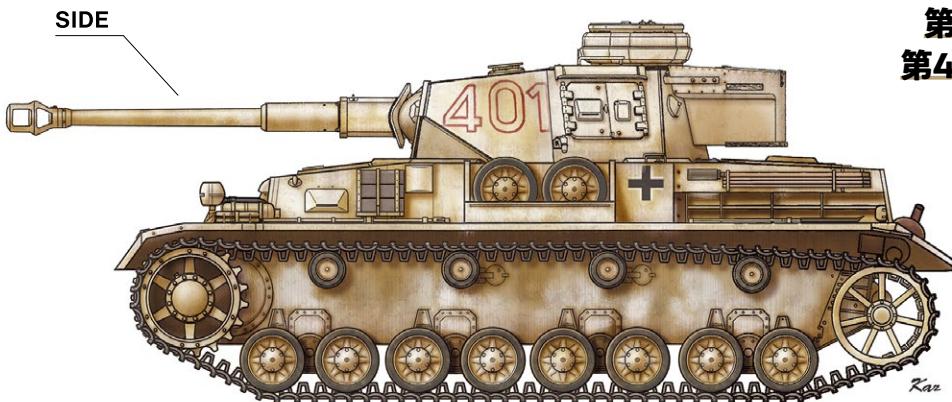
GERMANY
ドイツ

PZ.KPFW.IV AUSF.G

Panzerkampfwagen IV Ausf.G Sd.Kfz.161/1

AFV
COLORING
MUSEUM

IV号戦車 G型
(特殊車両番号 161/1)



ドイツ国防軍
第19戦車師団第27戦車連隊
第4中隊所属車両「401」号車

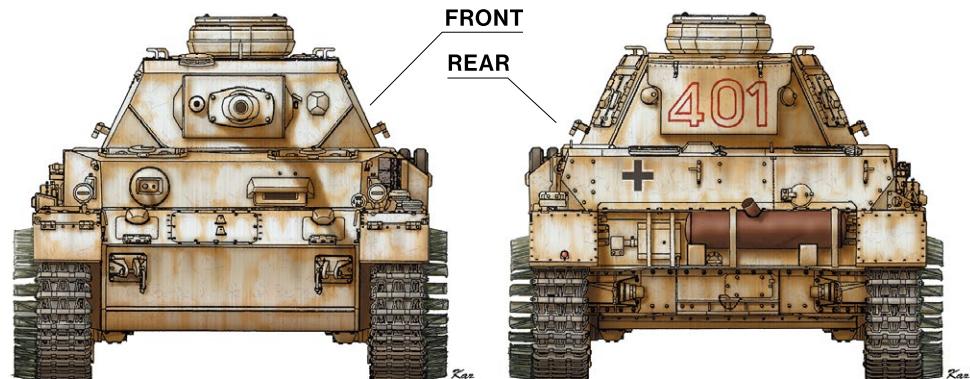
1942年から翌年にかけての冬、東部戦線のハリコフ戦に参加した第19戦車師団第27戦車連隊所属のIV号戦車G型初期生産車両。43口径の長砲身戦車砲を搭載した車体は、ダークイエローの基本色の上から石灰または白色の水性塗料による冬季迷彩が全体に塗られている。しかし度重なる戦闘や移動により白色塗装が剥がれ薄くなり、下地の基本色が見えている。車体側面にはドイツ十字の国家章が、砲塔側面には第4中隊で本部小隊所属の「1」号車を示す赤色縁取りだけ（黒色の可能性もある）で描かれた「401」の車両番号が見える。キューポラ前方の棒は直接照準器である。

KIT RECOMMEND
IV号戦車G型のオススメキットはこれだ!

Pz.Kpfw.IV Ausf.G (LAH Division Kursk 1943)
DRAGON

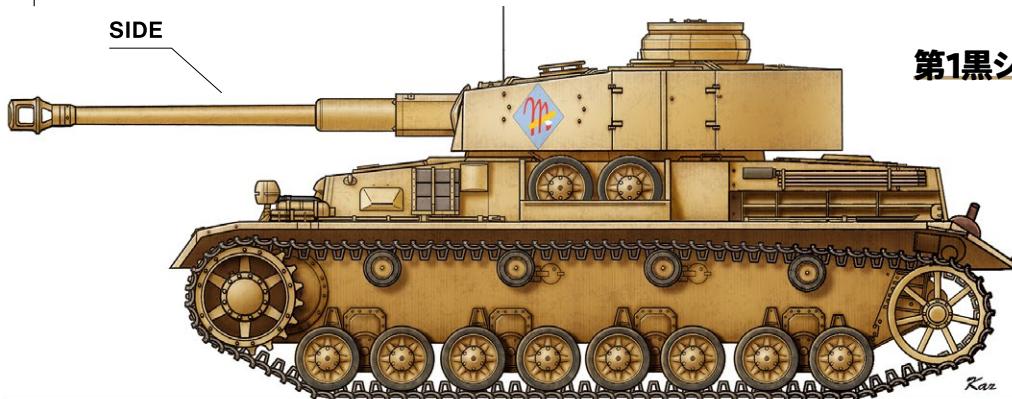
●今回はドラゴンのIV号戦車G型LHA師団 ハリコフ1943をオススメ。キットは二重バッフル型のマズルブレーキを装備したG型をモデル化。イラストの第19戦車師団と肩を並べてハリコフで戦ったSS第1戦車師団“LHA”的カカルグラフ製デカールもセットされている。

ドイツ軍IV号戦車G型
LAH師団 ハリコフ1943
●ドラゴン (1/35 税込9438円)
●プラツ www.pioltz-hobby.com



▲前面と後面から見た同じIV号戦車G型の車両。部隊マークや車体マークなどではなく、砲塔後部のゲベックカステン（物品箱）の後面に「401」の車両番号が、機関室の後面左側にドイツ十字の国家章が描かれているだけである。そして同車両は雪上で接地圧を軽減するために、履帯外側に爪が付いた幅広のヴィンターケッテ（冬期用履帯）を装着している。またイラストでは作画の都合で省略しているが、実車には前部車体の上面と前面に予備のヴィンターケッテが積まれていた。

SIDE

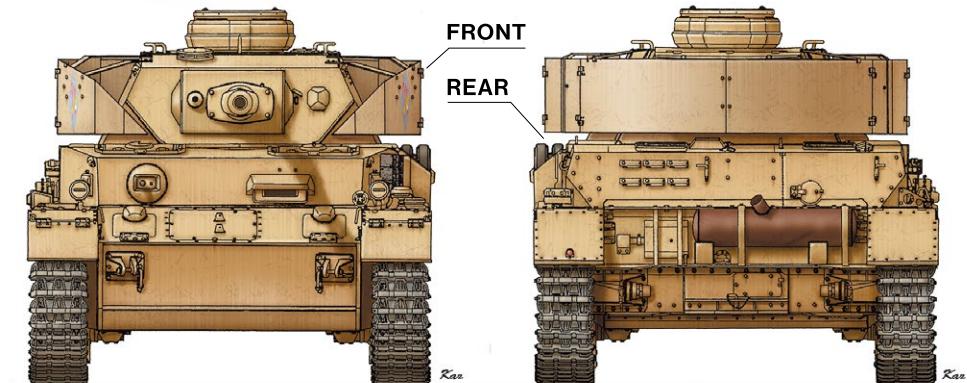


イタリア国防義勇軍 第1黒シャツ機甲師団「レオネッサ」 第1中隊所属車両

1943年6月、カンパニャーニョ・ロマーノ基地で訓練中の第1黒シャツ機甲師団「レオネッサ」第1中隊所属のIV号戦車G型後期生産車両。独武装SSに似た組織のM.V.S.N.（国防義勇軍）では、予想される本土上陸に備えて敵上陸部隊を水際で叩き首都ローマの防衛を担う機甲部隊の創設を進めた。ムッソリーニ統帥は独ヒムラーSS長官に危機を訴え、機甲部隊創設用に機材と訓練指導の人員を借り受けた。こうして到着したG型はダークイエローの基本色に水色菱形と赤い'M'マーク、黄色いファシス(斧)の部隊マークが砲塔シルヴェン側面に描かれた。

FRONT

REAR



▶前面と後面から見た同戦車。車体前後には部隊マークや車両番号ではなく、ブレーンな状態であった。さらに長砲身の48口径7.5cm戦車砲を搭載した同戦車は、75mm戦車砲を装備した国产のP.40重戦車が未配備だった当時、イタリア軍最強の戦車であった。車体右側のアンテナや一枚式ハッチのキューボラ、砲塔シルヴェンの装備などから1943年4月ごろの後期生産型と思われ、ドイツ側が最新機材を提供していたことが窺えるが、休戦とともにドイツに返却された。

HISTORICAL COLUMN

イタリア軍のドイツ戦車



●イタリア休戦後に多くの自国戦車がドイツ軍に鹵獲使用されこと比べると、意外にもイタリア軍でのドイツ戦車の使用例はほとんどなかった。唯一に近い例がM.V.S.N.（国防義勇軍）の第1黒シャツ機甲師団「レオネッサ」に供与された車両で、第1戦車中隊（IV号戦車G型後期生産型×12両）と第2戦車中隊（III号戦車N型後期生産型×12両）および第3自走砲中隊（III号突撃砲G型初期生産型×12両）などから編成された。

開発当初は歩兵支援用の戦車であったIV号戦車は、その目的から短砲身の7.5cm KwK 37戦車砲（24口径）が搭載されました。しかし、対ソ戦や北アフリカ戦で敵戦車との直接対決が行なわれると榴弾射撃が主眼の同戦車砲では非力さが目立ち、戦場からは主砲の強化が求められます。そこで1942年に短砲身に代えて強力な長砲身の7.5cm KwK 40戦車砲（43口径）が採用され、F型の生産途中（F2型・のちにG初期型に分類）から搭載されたのです。長砲身では砲口初速が短砲身の385m/sから倍の740m/sになり、装甲貫徹能力は距離1000mでの35mmから倍以上の82mmに性能アップ。これで連合軍戦車と互角に撃ち合えるようになりますが、敵戦車の装甲厚増強を睨んでさらに長砲身の48口径砲も生産され、G型後期やH型、J型に搭載されました。

戦場で長く使われたIV号戦車は防御面でもつねに改修が行なわれ、A型では20mmであった車体前面装甲がB型で30mmとなり、さらにE型では50mmに強化されて、G型の30mm追加装甲を経てH型では80mmの一枚装甲板となり

ます。そしてH型では車体側面と砲塔周囲に「シルヴェン」と呼ばれた補助装甲板（5mmと8mm）も1943年4月から標準装備となります。同装備の目的は東部戦線で手を焼いたソ連のシモノフPTRS1941型対戦車ライフルから乗員ハッチなどを守る目的でしたが、2枚の装甲板の間に空間のある一種のスペースドアーマーの役割を果たして成形炸薬弾にも有効であることが判明して、それまでの生産タイプにも改修時に加えられました。またH型からは磁力吸着式の対戦車爆弾を防ぐために、装甲板には非磁性のツイメリットコーティングも施され、これは後期のドイツ戦車でも広く導入されました。

大戦中の全期間を通して配備されたIV号戦車ですが、ポーランド戦以前にはA型からC型までわずかに217両が配備されただけでした。それでも1941年の月産平均の39両から1942年に83両、1943年には252両、1944年には300両に増加を続けたのでした。そして凡庸な性能ながら最終のJ型までの生産数は8569両に達して、パンター戦車の生産の遅れから名実ともに主力戦車の座を保ったのでした。

PZ.KPFW.IV AUSF.G

イタリア軍よりドイツ軍が重宝、M42 da75/34セモヴェンテ(後編)



18口径から34口径の戦車砲に載せ替えて、ドイツ軍でも使用されたM42セモヴェンテについての後編です。模型作りや塗装の参考にご一読ください。

▲ドイツ軍によってゲスタフ・ライン戦線で使用された後に英軍に鹹獲され、第78歩兵師団の斧マークと第38歩兵旅団のクローバーマークが落書きされたM42自走砲。

ITALY
イタリア

M42 DA75/34 SEMOVENTE

Semovente da 75/34

AFV
COLORING
MUSEUM

セモヴェンテ da 75/34
(75mm 34口径長自走砲)

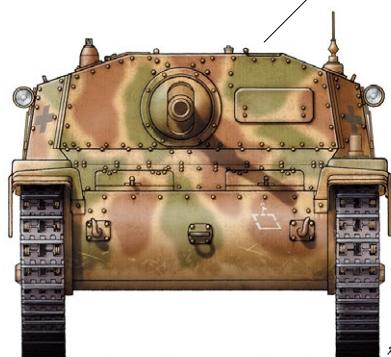
ドイツ国防軍
第162歩兵師団
第246戦車獵兵大隊
第1中隊所属車両

SIDE

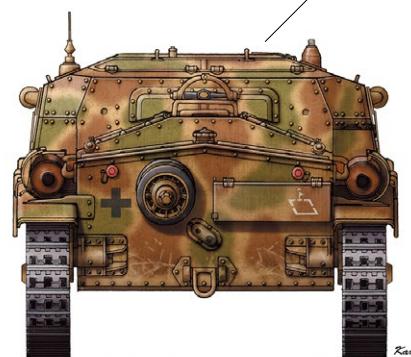


▲休戦後の1944年にイタリア戦線で展開したドイツ国防軍第162歩兵師団第246戦車獵兵大隊所属のM42 da75/34セモヴェンテ（自走砲）「123」号車。車体はダークグリーンとレッドブラウンの雲型の3色迷彩が、狭い間隔で塗られている。ドイツ国家章は白縁のない黒い十字で描かれている。こうした黒または白い十字章は、イタリア戦線の独軍鹹獲車両でしばしば見られた。戦闘室側面に付いた3個の器具はジェリ缶ラック。また履帯の脱落防止用に起動輪側面に新たに装着された4個の大型の爪に注目。

FRONT



REAR



KIT RECOMMEND M42のオススメキットはこれだ!

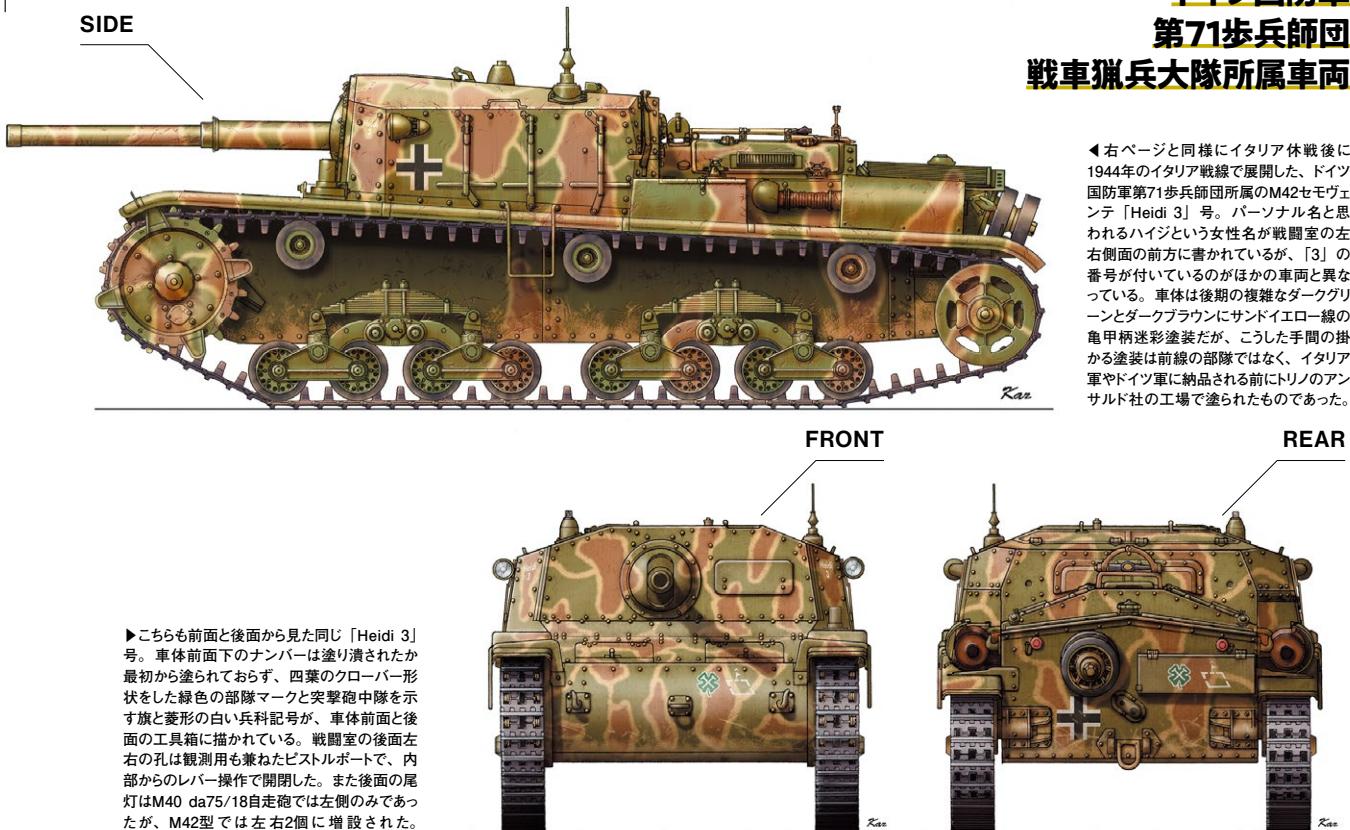


●前ページに引き続き、タミヤから発売されているM42 da75/34をご紹介。現状34口径のセモヴェンテが安定して手に入るのはこのキットくらいだ。パッケージは左ページに掲載の「Heidi 3」号。

セモベンテ M42 da75/34 ドイツ軍仕様
●タミヤ (1/35 税込4290円)
問タミヤ
www.tamiya.com

▲前面と後面から見た「123」号車。後面にも黒い十字の国家章や突撃砲中隊を示す白い兵科記号が描かれていたと推測して再現している。この3色迷彩はドイツ軍の塗料で塗られており、鹹獲されて配備後に塗り直されたものと思われる。またドイツ軍に鹹獲された車両の多くは、ナンバープレートを外されている。戦闘室上面の右側に設置された上が平らな半筋錠型の突起は、車長用のベンシル型ペリスコープ（潜望鏡）の台座で側面観測に使われた。

**ドイツ国防軍
第71歩兵師団
戦車猟兵大隊所属車両**



►こちらも前面と後面から見た同じ「Heidi 3」号。車体前面下のナンバーは塗り潰されたか最初から塗られておらず、四葉のクローバー形状をした緑色の部隊マークと突撃砲中隊を示す旗と菱形の白い兵科記号が、車体前面と後面の工具箱に描かれている。戦闘室の後面左の孔は観測用も兼ねたピストルポートで、内部からのレバー操作で閉鎖した。また後面の尾灯はM40 da75/18自走砲では左側のみであったが、M42型では左右2個に増設された。

**MECHANICAL COLUMN
イタリア戦車用無線機**



●イタリア軍の戦車や自走砲、偵察および連絡車両の多くは、1940年に開発されたマニエッティ・マレー社製のRF1CA無線機（自重13kg、通信範囲5～12km）を搭載した。M42 da75/34セモヴェンテの場合は、操縦席後方の左側壁面の内側に設置され、写真の様に大型の12Vバッテリーは無線機の上または右横に置かれている。CV33および35豆戦車の指揮車タイプもRF1CA無線機を搭載しているが、バッテリーは戦闘室後方の車外ボックスに装備している。

M42 da75/34セモヴェンテ（自走砲）に搭載された長砲身の34口径戦車砲は、初速475m/秒の18口径75mm砲に比べて610m/秒と大きく向上しており、距離1000mで70mmの装甲板を貫通可能となります。そして大型砲搭載のために戦闘室も前方へ110mm延長されましたが、前面装甲厚は増強されずに50mmのままでした。試作車は良好な試験結果を出して、イタリア軍は280両を発注します。

対戦車戦の切り札として期待された新型セモヴェンテでしたが、当初の予定より開発が遅れたためにそのツケは間もなく回って来ます。1943年5月からはM.V.S.N.（国防義勇軍）の第1機甲師団「M」第19中戦車大隊所属の2個中隊に配備がはじまり、各中隊には3両のM42自走砲と1両の指揮/観測用のカルロ・コマンドが配備されました。その後、第135機甲師団「第2アリエテ」第135対戦車大隊所属の3個中隊や同師団傘下の第10機甲連隊「ヴィットリオ・エマヌエレ2世」所属の3個中戦車隊、第30歩兵師団「サバウダ」第30対戦車大隊所属の3

個中隊および第31戦車連隊にも配備がはじまります。しかし9月8日にイタリア休戦が勃発して、わずか50両余りを完成して14両が組立て途中で生産が中止してしまいます。

それでも9月8日のイタリア休戦直後からローマ占領を目論むドイツ軍への防衛戦に参加しました。「第2アリエテ」第135対戦車大隊や第10機甲連隊所属のM42自走砲はドイツ軍に向けて砲火を開き、これがイタリア軍での唯一の実戦参加となりましたが、戦闘で数両が撃破されて残った車両は鹵獲されたのでした。

しかし、優れた火力性能に注目したドイツ軍は追加生産を要求、それに応じた枢軸側のイタリア社会共和国（R.S.I.）がその後も生産を行ない、終戦までに合計で約150両が生産されました。このドイツ軍への配備車両は、前方の起動輪側面に4個の大型の爪を追加で装着しており、これは脱落しやすい履帯の不具合を解決するためでした。

これらのM42自走砲はドイツ軍部隊に引き渡されて対戦車部隊で使用され、遅ればせながら連合軍相手に奮戦したのです。

M42 da 75/34 SEMOVENTE

【初期の伊戦車砲 2】もうひとつはオーストリア・ベーラー社の平射歩兵砲をブレダ社がライセンス生産した32口径47mmのM35歩兵砲をベースに開発されたM37/40戦車砲で、初速630m/秒で距離100mでは58mm、500mでは43mmの装甲貫通能力があり、M13/40中戦車やL40自走砲などに装備された。

自称“重戦車”であった中戦車 P.40重戦車（後編）



第二次大戦中盤のイタリアで開発され、主に休戦後にドイツ軍で使用されたP.40重戦車について解説します。模型作りや塗装の参考にご一読ください。

▲実車はローマのチェキニョーラ軍用車博物館とカゼルタ戦車学校を経てレッヂェ騎兵学校に残されており、写真は末期迷彩塗装の後者の車両。

ITALY
イタリア

CARRO ARMATO P40

Carro Armato P26/40

AFV
COLORING
MUSEUM

P40 重戦車
(26t 重戦車 40 年式)



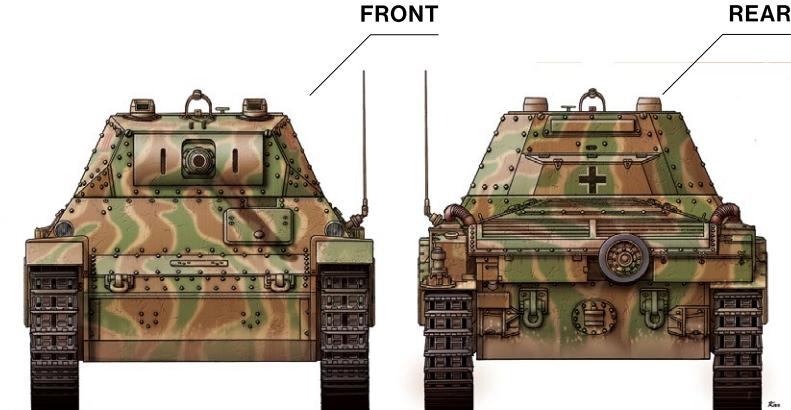
ドイツ武装親衛隊 第24山岳師団『カルストイエーガー』 戦車中隊第1小隊所属車両「111」号車

◆大戦末期の1945年4月、スロヴェニア（旧ユーゴスラヴィア）国境近くの北伊フリウリで撤退戦を行なう、ドイツ軍第24武装SS山岳師団「カルストイエーガー」戦車中隊第1小隊所属のP.40重戦車「111」号。当初、ワルターSS中尉が小隊長を務めた「111」号車は、ダークイエローをベースにダークグリーンとレッドブラウンの緻密な亀甲迷彩で塗装されていたが、この塗装見本の車両は同色の縦縞パターンで塗られているため小隊長に代わったペールソSS軍曹の車両であろうか。また2色の間隔がややラフなため、前線後方で部隊による塗装も考えられる。

KIT RECOMMEND

P.40重戦車のオススメキットはこれだ!

P.40型重戦車 アンティオ高校
パンツァージャケットキーホルダー付属
●プラット (1/35 税込7480円)
http://www.platz-hobby.com

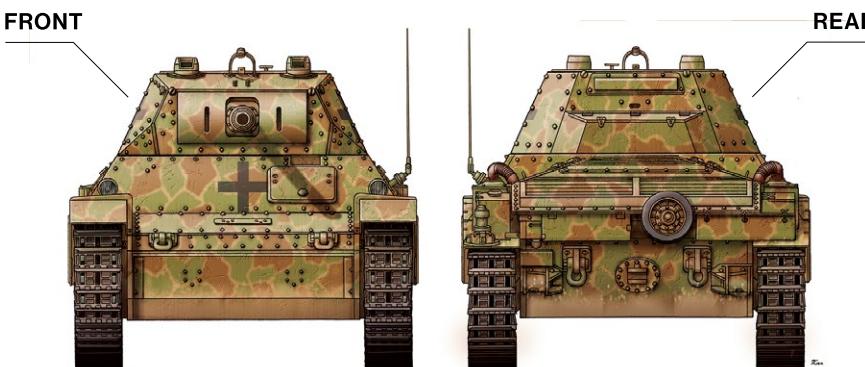


◆前面と後面から見た「111」号車。ドイツ十字の国家章は、車体側面とともに砲塔の錐具箱後面に描かれている。また砲塔の前部側面には赤色で白線の「111」の車両番号が確認できる。砲塔防盾の右側には同軸機関銃用の、左側には照準スコープ用の縦のスリットが見えるが、試作型では防盾の形状も異なっていた。また量産型の砲塔ハッチは大型で後ろにスライドする1枚ハッチであったが、試作型は左右2枚ハッチであった。さらに試作型では砲口に上開きの蓋が付いた。



ドイツ治安警察 第15警察戦車中隊所属

◆1945年4月、北イタリアのノヴァーラに展開したドイツ治安警察の第15警察戦車中隊所属のP-40重戦車。ダークイエローをベースにダークグリーンとレッドブラウンの後期タイプの細かい亀甲迷彩で塗装されているが、こうした手間の掛かる迷彩塗装はジエノバのファット・アンサルド工場で行なわれていた。またドイツ十字の国家章は、黒一色で砲塔側面に描かれている。足周りはM11/39中戦車から始まりM13/40中戦車に続いた2組の小型転輪ボギーをリーフ式スプリングで懸架して、それが2組サットされた旧式なスタイルのままであった。



▶同じく前面と後面から見た同車両。黒一色のドイツ十字の國家章は車体前面に描かれているが、砲塔後部の雑具箱には見られない。砲塔の左右には屈折式の大型ペリコープが搭載されて半円筒形の装甲板で保護されたが、試作型は從来の車両に見られるベンシル型が紡錘型の台座とともに搭載されている。ドイツ系イタリア人で構成された山岳治安警察部隊でも3個中隊にP.40型が配備された記録が在り、その一部は終戦際にバルチザンに鹵獲使用されている。

MECHANICAL COLUMN

イタリアのジェリ缶



- P.40型の車体側面の折畳み式ラックに付けられたジェリ缶はドイツ軍の物と似ているが、じつは一味違っている。イタリア軍タイプの側面の中央から四隅に伸びる窪みは対角線を成していく。中央の四角には王立陸軍(Regio Esercito)を示す“RE” 文字が刻印され、その上には“20 LITRI”(20リットル)の刻印も入っている。しかし、陸軍以外の刻印は確認されていない。また、混用を避けるため、水を入れたajuulinにはしばしば白十字が描かれた。

開発途中で近代的デザインに進化したP.40重戦車でしたが、国内では電気溶接や铸造構造による量産が苦手なため、主装甲はまだリベット留めのままでした。そして26tで自称“重戦車”的P.40型は、他国戦車基準では中戦車扱いでした。さらに乗員はドイツ軍のIV号戦車やパンター戦車の5名と比べてひとり少ない4名で、車長が砲手を兼ねるために砲塔旋回や素早い照準などの戦闘能力では、やや落ちる懸念も残りました。また1942年に数種類の試作車両が作られましたが、実は同じ車両のサイドスカートをデザイン違いに変えたり、丸みを帯びた車体前方下部に薄い軟鉄製の角張ったパーツを張り付けた苦肉の改修だと、近年の写真分析で判明しています。

しかし、採用された34口径75mm戦車砲は500mで70～80mm、1000mで60～70mm厚の装甲貫通能力を有しており、中距離なら大抵の連合軍戦車を一撃で撃破する性能がありました。そして前面装甲強化のために無線手元にこれまで装備されていた連装の8mm M38機関銃も廃止され、砲塔のM38型同軸機関銃も停止されて、砲塔のM38型同軸機関銃も停止されています。

関銃（576発）だけが残されました。この大型車体を動かす動力としては、当初捕獲したT-34戦車を参考に開発したフィアットSPA社製330馬力ディーゼルエンジンを搭載する予定でしたが、この試作エンジンが不調であったため同馬力のドイツ・マイバッハ製V8ガソリンエンジンをフィアットSPA社でライセンス生産。しかし工場の爆撃により、本格的な生産は1943年6月まで待つことになりました。

こうして開発を終えたP.40重戦車は、1943年1月に500両の発注を受けました。しかし爆撃によりエンジン生産が遅延して、同年9月のイタリア休戦までに完成したのは、わずかに21両でした。それでも、北イタリアの枢軸側R.S.I.政権下で引き続き生産が行なわれて1945年3月までに65両がドイツ軍に配備されました。ドイツ武装親衛隊第24山岳旅団（後に師団）『カルストイエーガー』は、1944年10月に14両を受領しましたが、その稼働率は50%を越えませんでした。また、ドイツ治安警察部隊でも40両が配備され、ドイツ軍戦車として短い戦歴を終えたのでした。

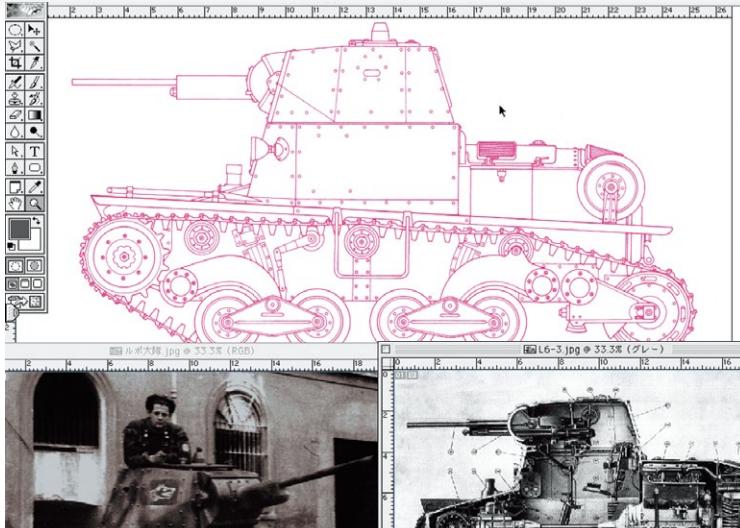
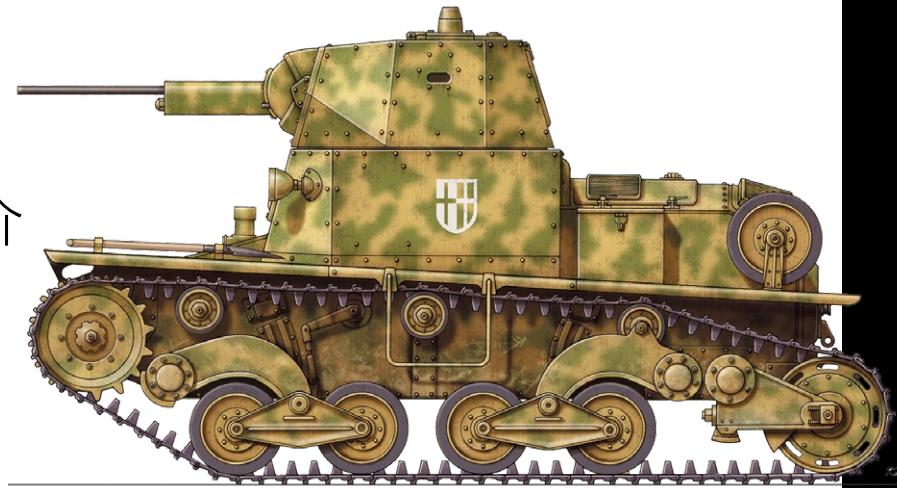
CARRO ARMATO P.40

吉川和篤 流

本書に掲載された イラストの 作画手順の流れを紹介

軍事ライターでありながら、イラストレーターでもある著者が描いたイラストは、様々なレイヤーの積み重ねから製作されている。ここではその作品の一例を、順を追って解説してみよう。

AFV
COLORING
MUSEUM



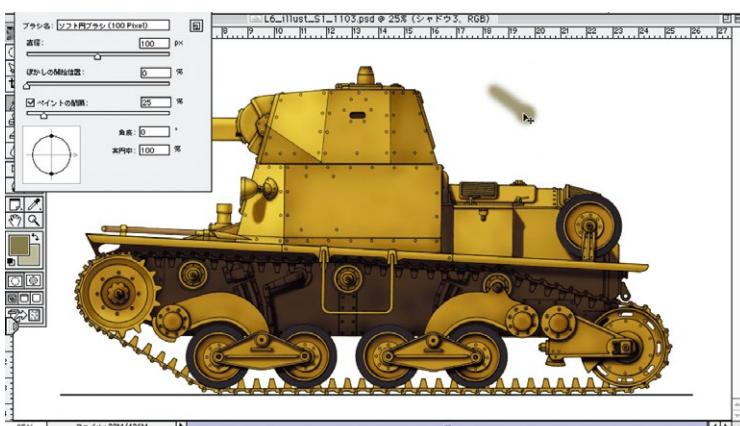
▲資料が集まつたところで、まず車体側面の線画作成から開始する。使用ツールは老兵のMac G4で、ソフトはIllustrator 8.0。どちらも20年以上の付き合いだが、処理速

度もとくに問題なく使い続けている。今回はイタリア軍のL6/40軽戦車なので、当時発行のマニュアルに掲載されていた透視図や写真を基にして、側面の線画を描き上げた。



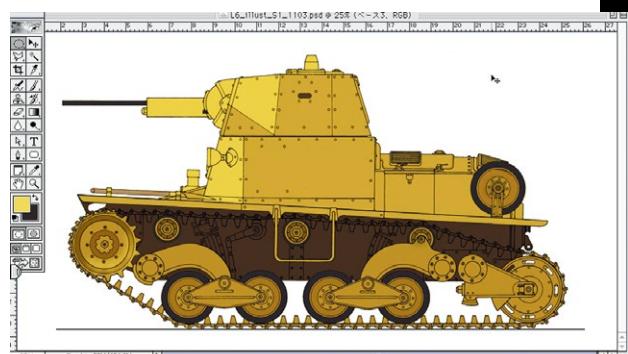
▲連載テーマの戦車が決まつた段階で手持ちの資料を広げて、各型式の違いや塗装バリエーションなどをこまかく調べておく。

資料に基づいて原画となる線画を製作



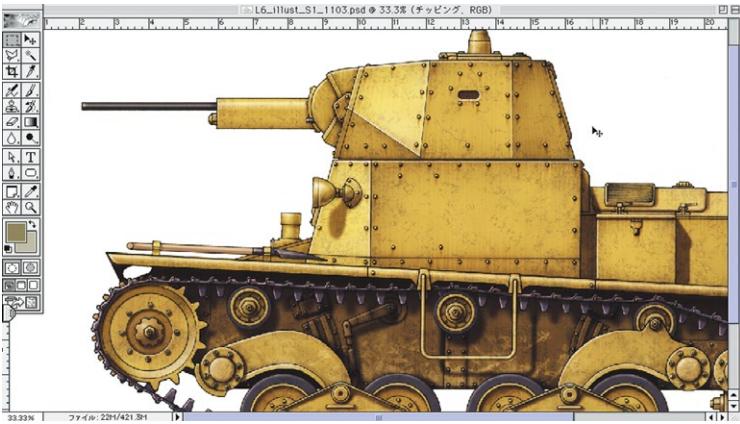
光源位置を設定し、
立体感を表現

▲平面塗りが終わつたら、そのレイヤーの上に新たにシャドウ（乗算）やハイライト（スクリーン）のレイヤーを設けて、ブラシツールのサイズを変えながら描画モードの強さを20~40%ほどにして立体的に描く。



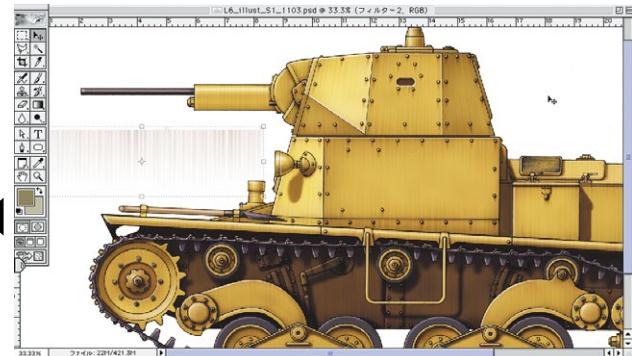
基本的な着彩と 陰影付け

▲線画が完成したらPhotoshop 6.0ソフトに移動して、全体に馴染ませるために不透明度を80~90%の乗算に設定。陰影も想定して平面塗りを行なう。



小さな傷や 泥汚れなどを描き込む

▲これも模型塗装ではチッピングと呼ばれるこまかい傷を全体に描き込む。とくに擦れそうな装甲の角やハッチなどの部分を密にして、立体感に注意。さらに下部には泥汚れも加える。

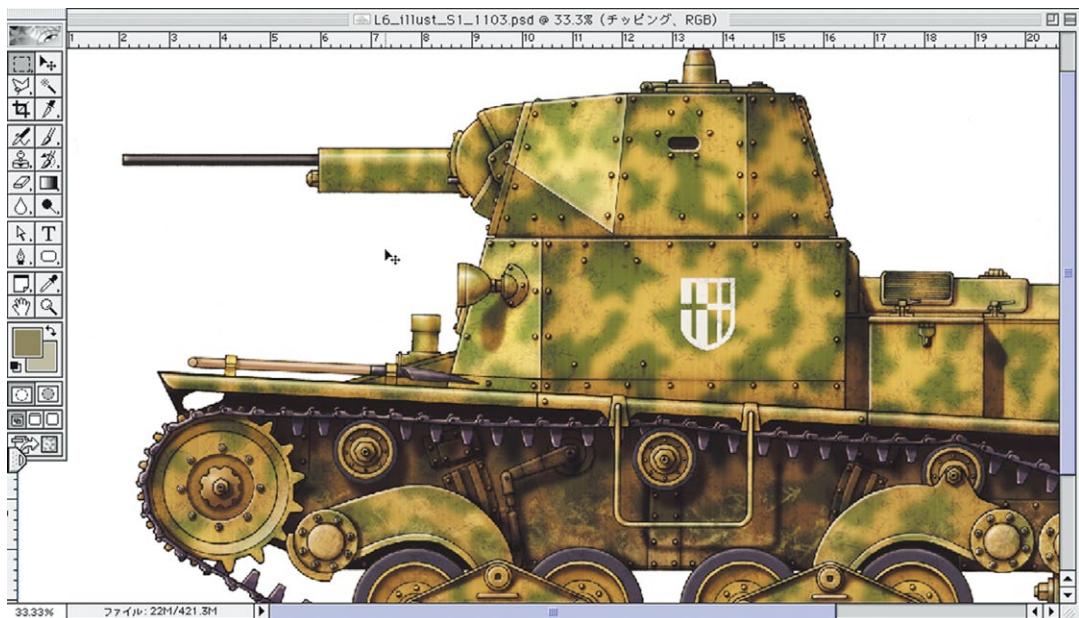


雨だれなどの 汚れ表現を施す

▲陰影塗りの次は、模型におけるフィルタリングを行なう。これには自作した流れる素材を70%ほどのレイヤー（乗算）で重ね、装甲面に合わせて変形させる。

迷彩塗装を描き マーキングを施す

▼ベース塗りが終わり、イラスト作成作業の80%以上が完成したと言える。その後は、解説したい塗装図に合わせて迷彩パターンを通常または乗算レイヤーで上から被せていくが、乗算の場合は例えば作例のダークグリーン迷彩が、サンドイエローのベースにのせたときに、見た目の緑色になるよううすい青色で塗っている。また迷彩パターンや白いマークの不透明度は80%にして周りと馴染ませている。



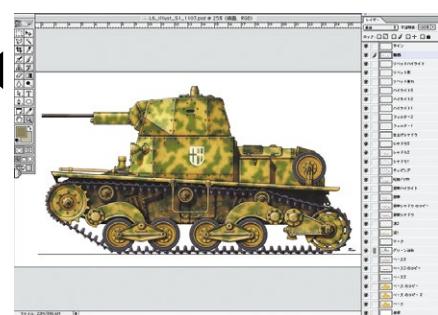
参考

▼立体的なベース塗りを流用して、何種類かのバリエーション製作が可能になるのが、迷彩パターンや色調の変化で見た目の印象が大きく変わるのがおもしろい。



文字原稿を執筆し作業終了

▲イラスト作成用に拝借した資料を読み込んで、文字原稿を執筆する。全体のレイアウトは連載初回に決めたフォーマットを変えず、文字数は毎回同じとなる。



イラスト原稿の完成

▼迷彩やマークをのせて作業終了となるが、色調により陰影やハイライトを微調整する。また画面右にすべてのレイヤーが見えるが、複雑な作品はさらに多くなる。

ISBN978-4-499-23429-0 C0076 ¥3800E



定価(本体3,800円+税)

9784499234290



1920076038006

AFV Armour Modelling PRESENTS
COLORING MUSEUM
AFVカラーリング博物館

